



近畿ブロックのHIV医療体制整備

研究分担者 渡邊 大

独立行政法人国立病院機構大阪医療センター臨床研究センター
エイズ先端医療研究部 HIV感染制御研究室長

研究要旨

【目的】本研究では、近畿ブロックにおける HIV 診療の課題を明らかにし、HIV 診療の向上を目的とする。【方法】患者動向の調査に加え、近畿ブロック都道府県・エイズ拠点病院等連絡会議、研修会の企画と実施、資料の作製などを行った。【結果】患者動向では新規 HIV 感染者数の減少、AIDS 患者の減少、CD4 数 200/μL 未満の患者の減少を認めた。研修会の実施数もコロナ禍以前と比較して開催数は減少していた。【結論】近畿ブロックではコロナ禍以前よりも研修会の開催数は減少したものの、リアルな研修会を実施し、HIV 診療の向上に貢献したと思われた。新型コロナウイルス感染症の流行下における HIV 診療および研修会のあり方については今後の検討課題である。

A. 研究目的

エイズ診療は日本を8つのブロックに分けた診療体制が構築されている。その中で、近畿ブロックは大阪・兵庫・滋賀・京都・奈良・和歌山の2府4県から成り立っている。2007年にそれぞれ府県で中核拠点病院が定められ、ブロック拠点病院である大阪医療センターとともに、地域における医療体制の整備を行っている。本研究では、近畿ブロックにおける HIV 診療の課題を明らかにし、HIV 診療の向上を目的とした。

HIV 診療にはさまざまな解決すべき課題が残されている。本研究では、HIV 検査の受検や医療機関の受診を行わずに AIDS 発症に至る心理的過程を明らかにすること（以下、AIDS 発症に至る心理的背景に関する研究）、高齢者福祉サービスの充実のために HIV 感染者の生活状況・サービス利用の実態や問題点を明らかにすること（以下、高齢者福祉サービスの充実のための研究）についても研究を行った。

B. 研究方法

患者動向の調査に加え、中核拠点病院打ち合わせ会議、近畿ブロック都道府県・エイズ拠点病院等連絡会議、研修会の企画と実施、資料の作製、ホームページによる情報発信、拠点病院への HIV 診療に関するアンケート調査を行った。研修・教育に用いた資料は次の通りであった（表1）。

- あなたに知ってほしいこと
(2021年11月発行<第16版>)
https://osaka-hiv.jp/pdf/anatani_shittehoshii_v16.pdf
- HIV/AIDSの正しい知識～知ることから始めよう～
(2019年2月発行<第2版>)
https://www.haart-support.jp/pdf/h31_knowledge_hiv_aids.pdf
- 抗HIV治療ガイドライン（2021年3月発行）
<https://hiv-guidelines.jp/pdf/guideline2021.pdf>
- Healthy & Sexy（2014年3月発行）
<https://osaka.hosp.go.jp/wp-content/themes/osaka-iryou/>

表1 研修・教育に用いた資料

名称	作成者	研究班	主な使用方法
あなたに知ってほしいこと	大阪医療センター	「HIV感染症の医療体制の整備に関する研究」班	研修会・講習会で配布
HIV/AIDSの正しい知識～知ることから始めよう～	社会福祉法人武蔵野会	「HIV感染症及びその合併症の課題を克服する研究」班	研修会・講習会で配布
抗HIV治療ガイドライン	大阪医療センター	「HIV感染症及びその合併症の課題を克服する研究」班	研修会・講習会で配布
Healthy & Sexy	大阪医療センター	「HIV感染症の医療体制の整備に関する研究」班	研修会・講習会で配布
あなたとあなたのイイひとへ	大阪医療センター	「HIV感染症及びその合併症の課題を克服する研究」班	研修会・講習会で配布

img/department/khac/medical/resource/healthy-sexy2014.pdf

- あなたとあなたのイイひとへ（2014年3月発行）
<https://osaka.hosp.go.jp/wp-content/themes/osaka-iryoku/img/department/khac/medical/resource/anatato2014.pdf>
 AIDS発症に至る心理的背景に関する研究については、大阪医療センターに通院中のHIV感染者のうち、AIDS発症の状態でのHIV感染が判明した10例を対象に、半構造化面接を行った。高齢者福祉サービスの充実のための研究については、2020年4月1日から2021年3月31日の間に大阪医療センターを受診した75歳以上のHIV感染者を対象に基礎情報、生活状況、保健医療・福祉サービス利用状況等の情報を診療録から抽出し、単純集計を行った。

（倫理面への配慮）

研修・教育に用いた症例呈示では、患者個人が特定されない等の配慮を行った。AIDS発症に至る心理的背景に関する研究および高齢者福祉サービスの充実のための研究については倫理審査をうけ、承認を得た。

C. 研究結果

当院の2021年の初診患者数は115例であった（図1）。2016年から2019年までは154～166例と、ここ数年間の初診患者数は横ばいであった。2020年の初診患者数は128例と大きく減少し、2021年はさらに減少していた。初診患者のうち、新規診断患者数は77例であり（図2）、AIDS患者の割合は20.8%であり、2020年と比較すると病期が進行した患者の割合

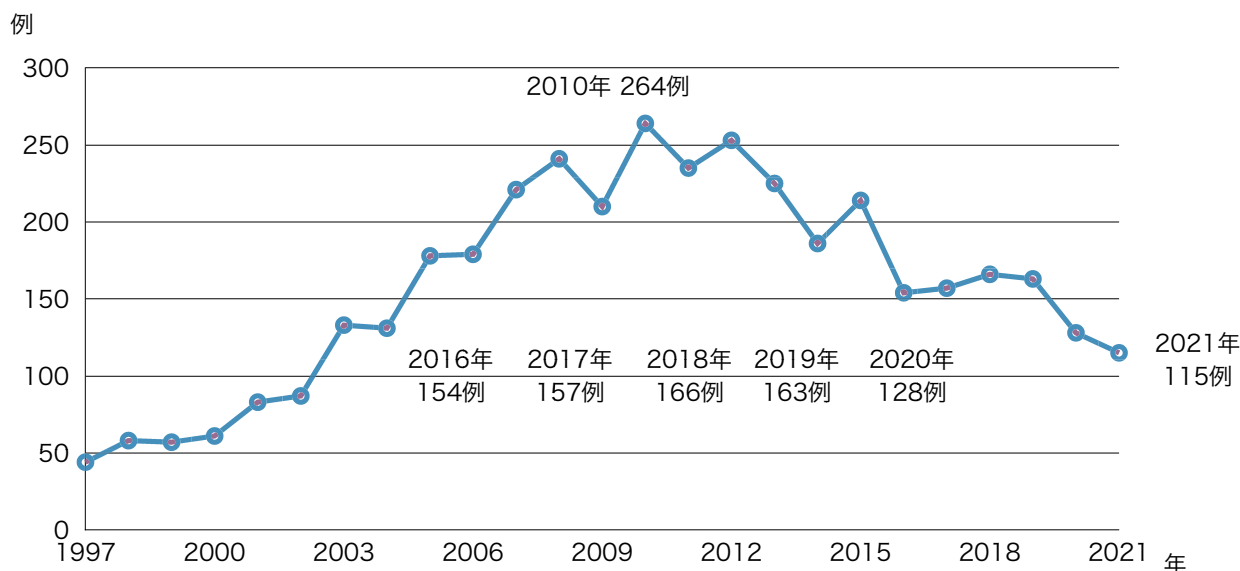


図1 初診患者数の年次推移

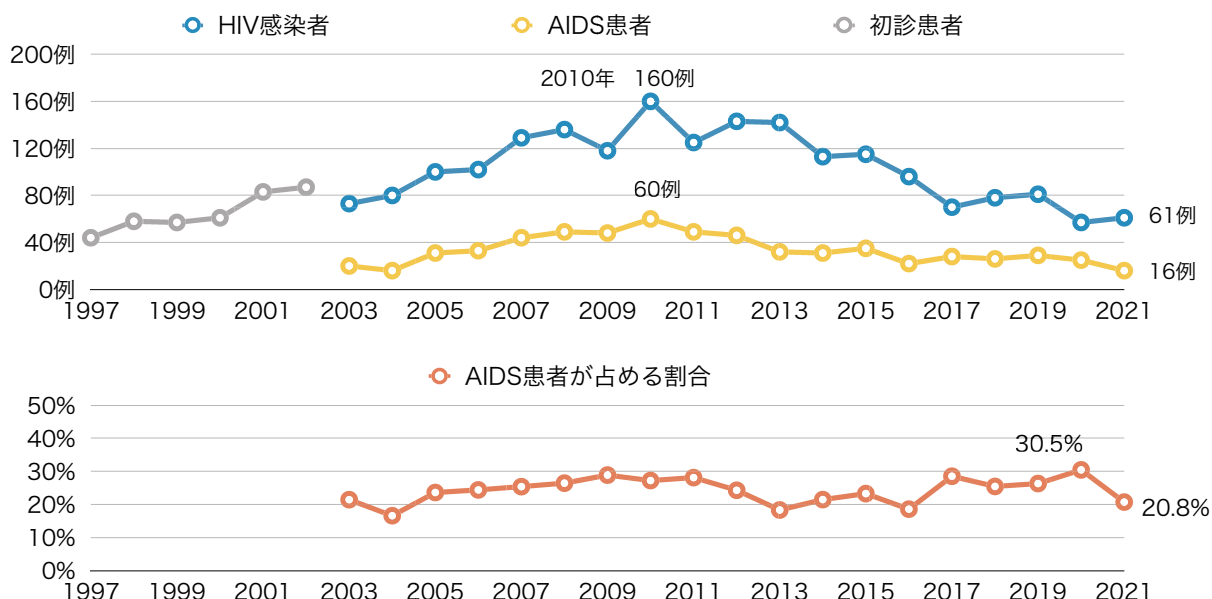


図2 新規診断患者数の年次推移とAIDS患者が占める割合

が低かった。新規診断患者数は2020年と2021年に大きな差はなかったが、転院患者数に大きな減少を認め、転勤などの人の移動に制限がかかった可能性が示唆された（図3）。2019年から2021年の新規未治療患者の診断時の患者背景を図4に示す。コロナ禍以前の2019年と比較すると、2020年ではCD4数200/μL未満の症例が多く、2021年では200/μL未満

の症例が少なかった。紹介元施設をみると、2020年で保健所等自発検査の割合が減少し、2021年で保健所等自発検査の割合が増加していた。一方で、急性感染者の割合や献血センターからの紹介例の割合は2021年も2020年と同様に2019年よりも高い数値を示していた。以上から、HIV未診断者の受検行動の変化が推測された。

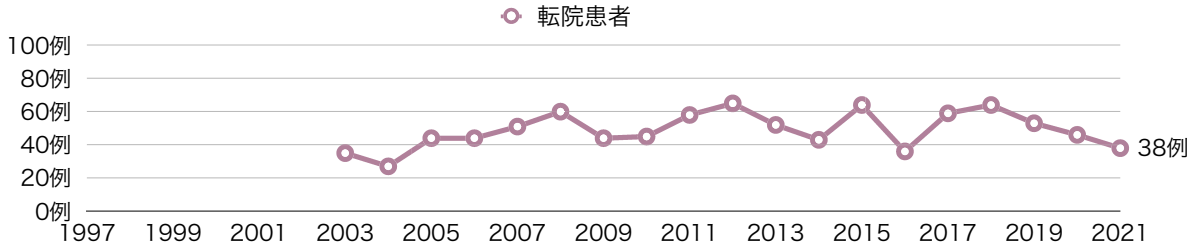


図3 転院患者数の年次推移

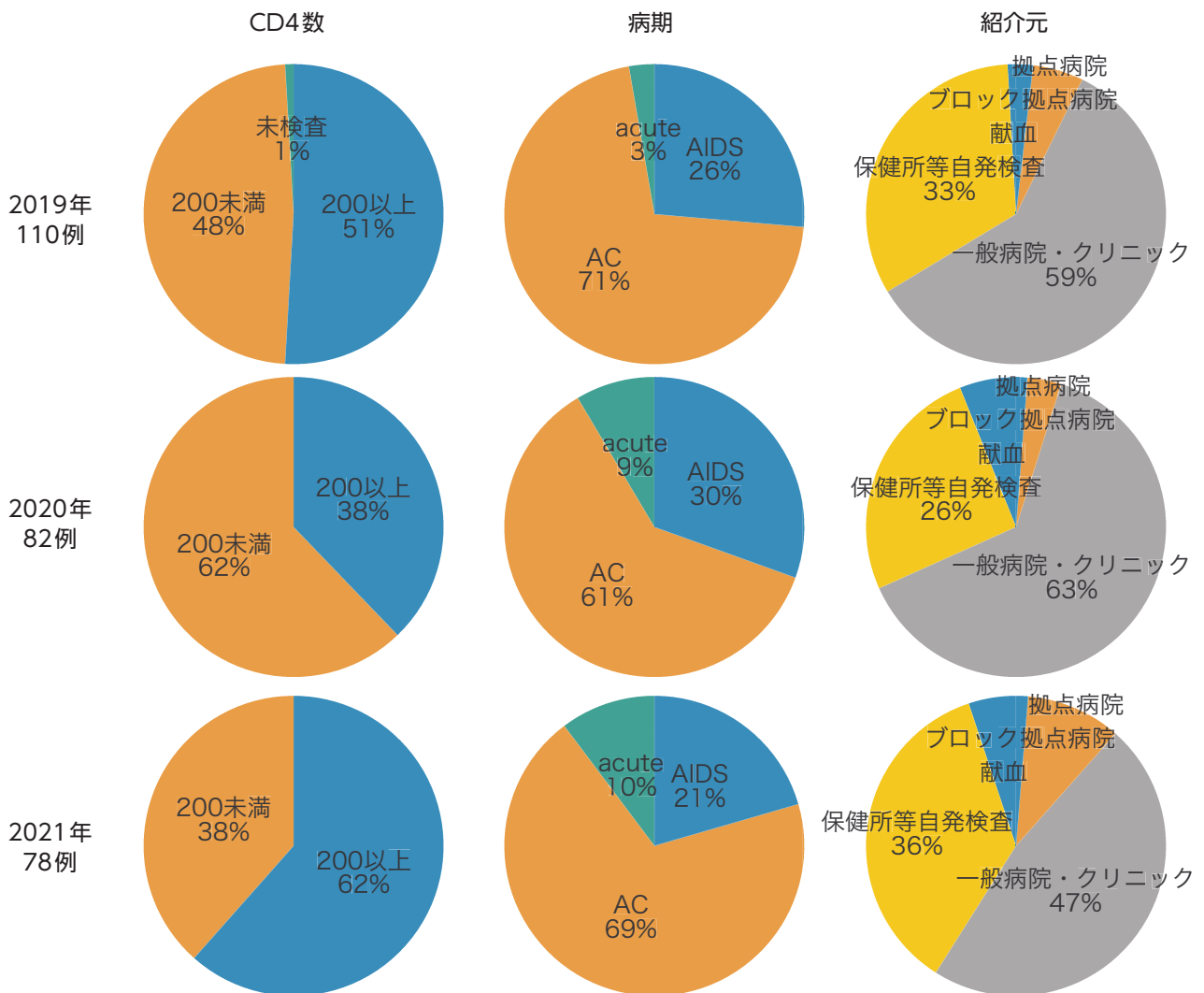


図4 2019-21年の新規未治療患者の診断時の患者背景

次に、2021年度の研修会の実施実績を表2に示す。実施した研修会はリモート開催を含む6件（実施予定を除く）であり、昨年度の5件と比較すると実施回数は同程度であった。開催を行ったのはブロック拠点病院である当院が主催したもので、中核拠点病院が計画した研修会・講習会はいずれも開催されなかった。また、2022年1月に予定されたHIV/AIDS看護研修（応用コース）は、オミクロン変異株の流行のため開催は延期となった（2022年2月14日時点）。ソーシャルワーク研修会は開催をリモートに変更することにより参加者は大きく増加した。HIV感染症医師一ヶ月実地研修に関しては、昨年度は応募がなかったが、今年度は2名の参加があり、HIV感染者・AIDS患者の診療に関する実施研修を行った。

今年度は中核拠点病院打ち合わせ会議を実施することができず、近畿ブロック都道府県・エイズ拠点病院等連絡会議も時間短縮して開催した。

資料では『あなたに知ってほしいこと』の改訂を行った。主な改訂内容は抗HIV薬の掲載内容の変更であった。エルビテグラビル・コビシタット・テノホビルアラフェナミド・エムトリシタビン配合錠とリルピビルン・テノホビルアラフェナミド・エムトリシタビン配合錠を削除し、ドラビリンおよびドルテグラビル・ラミブジン配合錠の追加を行った。

AIDS発症に至る心理的背景に関する研究については、AIDS発症の状態でのHIV感染が判明したHIV感染者10名を対象に、半構造化面接を行った。現在、収集したデータを逐語録に起こす作業中である。

高齢者福祉サービスの充実のための研究については調査期間内の受診者のうち情報取得が可能であった31例を対象とした。平均年齢は78歳で、男性が87%（27例）を占めていた。生活状況については、

独居が16例（51%）で、そのうちキーパーソンがいない人が3例（9%）であった。キーパーソンに告知がない症例の中で、意思疎通困難時に病名開示可の確認が取れていない症例は4例（12%）であった。保健医療サービス利用状況に関して、6例（19%）がHIV感染症を伝えたくて歯科受診を希望していた。介護認定を受けているのは7例（22%）であり、そのうち介護保険サービス利用者は6例（85%）であった。

D. 考察

昨年度に報告した通り新型コロナウイルス感染症の流行により、HIV診療は大きな影響をうけた。患者動向では急性感染で診断された症例が多かったこと、献血で陽性が判明した症例が多かったことがコロナ禍の影響を示唆している。社会全体が発熱に関して敏感になっているため、コロナ禍以前であれば解熱剤で経過観察にすることが予想される症例でも、会社に出勤できないなどの理由で受診を促された可能性が考えられた。一方で2021年は2020年と反対に、AIDSやCD4数低値などの病期が進行した症例は減少していた。2020年と2021年の両年を合わせると2019年と同様の患者背景になっていた。この現象の理由の1つとして、本来なら2020年に診断されるべき自覚症状のない症例が、1年遅れで2021年に診断されたことがあげられる。診断の機会が数年うばわれるとAIDS発症の危険性が憂慮されるが、1年遅れ程度で止まっているのであれば、HIV感染者の予後には大きな影響がない可能性がある。いずれにしても、今後の患者数の動向は重要であり、コロナ禍の影響がHIV感染症の診断の遅れにつながらないようにすべきであろう。

表2 研修会の実施実績

名称	目的	主な対象	昨年度の参加人数	今年度の参加人数
HIV/AIDS看護研修(第1回 初心者コース)	知識普及	看護師	36	25
HIV/AIDS看護研修(第2回 初心者コース)	知識普及	看護師	開催なし	開催なし
HIV感染症研修会	知識普及	多職種	24	17
HIV医療におけるコミュニケーションとチーム医療研修会	実習	多職種	16	13
HIV感染症医師一ヶ月実地研修	実習	医師	応募なし	2
近畿ブロックエイズ診療拠点病院ソーシャルワーク研修会	教育・講習	MSW	20	51
近畿ブロックHIV医療におけるカウンセリング研修会	教育・講習	カウンセラー	リモート	リモート
HIV/AIDS看護研修(応用コース)	教育・講習	看護師	開催なし	延期・開催予定
HIV/エイズに関する研修会(和歌山県立医大)	知識普及	その他医療関係者	開催なし	開催なし
歯科における院内感染対策研修会(兵庫医科大学病院)	知識普及	歯科医師、歯科衛生士	開催なし	開催なし
HIV感染症に関する講習会(滋賀医科大学医学部附属病院)	知識普及	その他医療関係者	開催なし	開催なし
歯科における院内感染対策研修会(兵庫医科大学病院)	知識普及	歯科医師、歯科衛生士	開催なし	開催なし
歯科における院内感染対策研修会(兵庫医科大学病院)	知識普及	歯科医師、歯科衛生士	開催なし	開催なし

コロナ禍でのnew normalの確立は診療だけではなく研修会においても同様である。他のブロックでは昨年度と同様に研修会は行われなかった。当院では4件のリアルな研修会、2件のリモートの研修会を行った。リモートでも十分な研修効果が得られるかどうか今後の課題と思われたが、リモート開催によって参加者が大幅に増加した研修会もあり、リモート開催も選択肢の1つとして考えるべきであろう。

AIDS発症に至る心理的背景に関する研究については、現在データ分析中であり来年度に結果を報告したい。高齢者福祉サービスの充実のための研究から、キーパーソンや同居人に病名を伝えていない症例が一定数、存在することが示された。従って、日頃から病名の開示状況を把握し、意思疎通困難時の対応の確認が重要である。保健医療サービス利用に関しては、病名を伝えたいという受診を希望している患者が安心して地域の医療機関を受診できるような支援が必要である。

E. 結論

近畿ブロックでは去年よりも開催数は減少したもののリアルな研修会の実施し、HIV診療の向上に貢献したと思われた。新型コロナウイルス感染症の流行下におけるHIV診療および研修会のあり方については今後の検討課題である。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

海外

なし

国内

- 1) 渡邊大：抗HIV療法におけるTAF含有レジメンの有用性について。スポンサードセミナー2。第95回日本感染症学会学術講演会、2021年5月7日、横浜
- 2) 種田灯子、光井絵理、上原雄平、花岡希、山本裕一、上地隆史、渡邊大、西田恭治、上平朝子、白阪琢磨、加藤研：抗HIV治療開始後に1型糖尿病を発症し、免疫再構築症候群の関

与が疑われた3症例。第64回日本糖尿病学会年次学術集会、2021年5月20日、WEB

- 3) 櫛田宏幸、中内崇夫、矢倉裕輝、廣田和之、上地隆史、渡邊大、西田恭治、吉野宗宏、上平朝子、白阪琢磨：HIV-1感染血液透析症例におけるドラビリン血中濃度推移を測定した2症例。第34回近畿エイズ研究会学術集会、2021年6月12日、WEB
- 4) 中内崇夫、櫛田宏幸、矢倉裕輝、廣田和之、上地隆史、渡邊大、西田恭治、山下大輔、井上敦介、上平朝子、吉野宗弘、白阪琢磨：大阪医療センターにおけるアバカビル/ラミブジン配合剤の後発品の使用状況に関する調査。第75回国立病院総合医学会、2021年10月23日、WEB
- 5) 田中大地、西村英里香、岸由衣加、岩崎莉佳子、山口大旗、河本佐季、秦誠倫、山本裕一、渡邊大、西田恭治、加藤研：抗HIV治療開始後に抗GAD抗体陽性となった症例。第58回日本糖尿病学会近畿地方会、2021年10月30日、京都
- 6) 今橋真弓、照屋勝治、渡邊大、遠藤知之、南留美、渡邊泰子、Andrea Marongiu、谷川哲也、Marion Heinzkill、白阪琢磨、横幕能行、岡慎一：実臨床でのビクテグラビル/エムトリシタビン/テノホビルアラフェナミド（B/F/TAF）の有効性、安全性及び忍容性：BICStaR Japanの12ヵ月後向き評価。第35回日本エイズ学会学術集会・総会、2021年11月21-23日、品川
- 7) 櫛田宏幸、中内崇夫、矢倉裕輝、廣田和之、上地隆史、渡邊大、西田恭治、吉野宗宏、上平朝子、白阪琢磨：HIV-1感染血液透析症例におけるドラビリン血中濃度についての検討。第35回日本エイズ学会学術集会・総会、2021年11月21-23日、品川
- 8) 矢倉裕輝、中内崇夫、櫛田宏幸、廣田和之、上地隆史、渡邊大、西田恭治、上平朝子、吉野宗宏、白阪琢磨：日本人HIV-1感染者におけるドラビリンの血漿中濃度に関する検討 第1報。第35回日本エイズ学会学術集会・総会、2021年11月21-23日、品川
- 9) 中内崇夫、櫛田宏幸、矢倉裕輝、廣田和之、上地隆史、渡邊大、西田恭治、上平朝子、吉野宗宏、白阪琢磨：当院におけるドラビリンの使用状況に関する調査。第35回日本エイズ学会学術集会・総会、2021年11月21-23日、品川
- 10) 西川歩美、安尾利彦、水木薫、白阪琢磨、渡邊大、三田英治：大阪医療センターにおける薬害HIV遺族健康診断受診支援事業の利用状況および利用希望等に関する検討。第35回日本エイズ学会学術集会・総会、2021年11月21-23日、品川

- 11) 宇野俊介、菊地 正、林田庸総、今橋真弓、南留美、古賀道子、寒川 整、渡邊 大、藤井輝久、健山正男、松下修三、吉野友祐、遠藤知之、堀場昌英、谷口俊文、猪狩英俊、吉田 繁、豊嶋崇徳、中島秀明、横幕能行、岩谷靖雅、蜂谷敦子、渦永博之、吉村和久、杉浦 互：E157Q変異を有する未治療HIV-1感染者におけるインテグラーゼ阻害薬をキードラッグとした抗HIV薬開始後の臨床経過。第35回日本エイズ学会学術集会・総会、2021年11月21-23日、品川
- 12) 菊地 正、西澤雅子、小島潮子、大谷眞智子、椎野禎一郎、俣野哲朗、佐藤かおり、豊嶋崇徳、伊藤俊広、林田庸総、渦永博之、岡 慎一、古賀道子、長島真美、貞升健志、近藤真規子、宇野俊介、谷口俊文、猪狩英俊、寒川 整、中島秀明、吉野友祐、堀場昌英、茂呂 寛、渡邊珠代、蜂谷敦子、今橋真弓、松田昌和、重見 麗、岡崎玲子、岩谷靖雅、横幕能行、渡邊 大、小島洋子、森治代、藤井輝久、高田清式、中村麻子、南留美、山本政弘、松下修三、饒平名 聖、健山正男、藤田次郎、杉浦 互、吉村和久、薬剤耐性HIV調査ネットワーク：国内新規診断未治療HIV感染者・AIDS患者における薬剤耐性HIV-1の動向。第35回日本エイズ学会学術集会・総会、2021年11月21-23日、品川
- 13) 織田佳晃、岡本 学、渡邊 大：高齢期を迎えたHIV陽性者の生活状況と保健医療・福祉サービス利用状況に関する実態調査。第35回日本エイズ学会学術集会・総会、2021年11月21-23日、品川
- 14) 川畑拓也、阪野文哉、渡邊 大、塩野徳史、福村沙織、朝来駿一、澤田暁宏、西岡弘晶、荒川創一、大森亮介、駒野 淳、森 治代、本村和嗣：MSM向けHIV・性感染症検査キャンペーン（2020年度実績報告）。第35回日本エイズ学会学術集会・総会、2021年11月21-23日、品川
- 15) 川畑拓也、渡邊 大、駒野 淳、伊禮之直、真栄田哲、崎原永辰、仁平 稔、久高 潤、仲宗根正：健康診断機会を利用したHIV・梅毒検査の提供（2020年度実績報告）。第35回日本エイズ学会学術集会・総会、2021年11月21-23日、品川
- 16) 渡邊 大：ブロック拠点病院における保険薬局薬剤師との連携を考える。シンポジウム7「保険薬局薬剤師を活用した外来患者服薬支援について考える～医師、看護師、薬剤師の連携～」。第35回日本エイズ学会学術集会・総会、2021年11月22日、品川
- 17) 渡邊 大、矢倉裕輝、廣田和之、上地隆史、中内崇夫、櫛田宏幸、西田恭治、上平朝子、白阪琢磨：当院におけるドルテグラビル・ラミブジン配合錠の安全性・有効性・臨床検査値の推移に関する検討。第35回日本エイズ学会学術集会・総会、2021年11月21-23日、品川
- 18) 渡邊 大：抗HIV治療ガイドラインにおけるダルナビルの位置付けと今後の展望。ランチョンセミナー8「これまでも、これからもダルナビル製剤」。第35回日本エイズ学会学術集会・総会、2021年11月22日、品川
- 19) 山本 祐、廣田和之、渡邊 大、長手泰宏、柴山浩彦：COVID-19に対するmRNAワクチン接種後にAIHAの再燃をきたした一例。第234回日本内科学会近畿地方会、2021年12月4日、WEB
- 20) 渡邊 大：近畿のHIV感染症および治療の現状と薬剤師への期待。シンポジウム13 慢性疾患としてのHIV感染症から長期薬物療法における薬剤師の果たすべき役割について考える。第43回日本病院薬剤師会近畿学術大会、2022年1月3日、WEB

H. 知的財産権の出願・登録状況（予定を含む）

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし